

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

山川英彦教授を送る

著者	太田 斎
雑誌名	神戸外大論叢
巻	64
号	4
ページ	1-4
発行年	2014-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001666/

山川英彦教授を送る

太 田 齋

山川英彦教授が2013年3月をもって定年退職された。1979年4月1日に赴任されたから、あしかけ34年の長きに亘って我が神戸外大で教鞭を執って来られたことになる。神戸外大は1986年に現在の学園都市に移転した訳だが、その前の六甲時代からの教員は、これで中国学科の中にはいなくなってしまうことになった。特に六甲時代に卒業した本学OBの中には一抹の寂しさを感じる方がおられるに違いない。

山川先生はここでわざわざ断るまでもないことだが、本学卒業生で、学部時代は長田夏樹先生のゼミに属し、白話文学作品の文法研究で卒論を執筆された。卒業後、名古屋大学大学院で研鑽を積まれ、その後同大学で4年間、助手を務められた後に本学に助教授（現准教授）として赴任された。本学教員としては林雪光先生の後任であったから、担当分野は中国古典文学ということであった。現代文は言うまでもないことだが、更に白話文、文言と広くこなす能力をお持ちだったし、古典文学も広く読んでおられ、確かな読解力をお持ちだから、ご本人としてはそれで意に介することはなかったということだろう。実際、その業績を拝見すると、白話文の文法が先生の研究の核を成していることが見てとれるが、こういった方面に限られることなく、時には『文鏡秘府論』の修辞論に関して論じられたり、『易経』の翻訳にも従事されたりもしておられる。専門が細分化する中で、白話と文言の両方をこなし、語学研究のみならず文学研究も行っておられたことは敬服に値する。

先生の特長である白話文の文法研究についてここで少し詳しく述べておこう。先生は中国語の文法史、中でも元・明時代の口語文献における文法を主な研究テーマとされ、特に、元代の文献に見られる中国語とモンゴル語の接触を反映する特異な文法について、多くの優れた研究を発表、この分野を一貫して牽引されてきた。この分野は先生を含む日本の研究者が世界に先駆けて開拓したものであるだけに、その業績は日本のみならず中国本土でも高く評価されている。また、明代の歴史文献において、口語的要素を濃厚に反映する文献を発掘・紹介することにも力を注ぎ、この分野に関心を寄せる多くの研究者がその恩恵を受けている。

学会活動では、これまで日本中国学会、日本中国語学会及び中国近世語学会の会員として、本学における全国規模の学会開催にあたり、その準備に力を尽

くすなどの貢献をされてきた。

山川先生について人事書類での決まり文句で形容するのは些か失礼かとは思いますが、真に温厚篤実の言葉が良く当てはまる方だったと思う。常に和を大事にされ、謙虚にして、声を荒げるようなところは見たことがない。この3月には定年退官後、特任教授として引き続き教壇に立っておられた佐藤晴彦先生も退任された。佐藤先生の剛と山川先生の柔は好対照で、私などは両方の教員がおられることで、学生の学習意欲がうまく継続することになったのではないだろうかと推測している。佐藤先生の剛に馴染めない学生は山川先生の柔に救いを見出していたのではないかなどと勘ぐっているが、OB、そして現役学生で実際に両先生の聲咳に接した者の印象はどうであろうか？ 出来の悪い学生だった私など、佐藤先生だけに習っていたなら、落ちこぼれて卒業さえ覚束なかったに違いない。名物教授のお二人が時を同じくして外大を去られることとなり、我々残った教員はこれまでお二人のお蔭で免れていた批判、叱責をもろに浴びることになるのではないかと戦々恐々としている。

神戸外大の創成期の教員の中では太田辰夫先生と長田先生のお二人が歴史文法の研究をなさっていた。長田先生は研究範囲が広く、東洋史の論文かと思われるようなものや音韻学、日本語の起源、少数民族語など様々な分野の論文を書かれた。中国語歴史文法も研究分野の一部であった。太田辰夫先生は文法に限らない豊かな言語学の知識を持っておられ、晩年は文学史のテーマの論文を執筆されたこともあったが、執筆する論文の対象分野はあくまでも文法であり、中国人研究者からも驚嘆の声が上がるほど大量の文献を読破され、厩大なデータを集めて、それを自在に用いておられた。歴史文法はこのお二人の競合する分野であった。この分野では長田先生の方が太田先生に遠慮するところがあったようなことを仄聞したことがあるが、真偽のほどは明らかではない。太田辰夫先生の後任の佐藤先生と林雪光先生の後任の山川先生は私にはちょっと太田、長田両先生の関係に似たものを感じる。佐藤先生も本学提出の修士論文で『元朝秘史』を扱われ、元代の破格な中国語もまた研究対象の一部であった。山川先生は教育の面では古典文学担当で、その傍らで元代の中国語の研究もずっと続けるという形になり、或いはご自分の本来の研究に割く時間が制限されるところもあったかも知れない。それがハンディになったかどうか分からないが、この分野ではちょっと佐藤先生に遠慮なさっているのではないかななどと思うところがあった。もしこの勘繰りが正しいなら、それは山川先生の謙虚さが現れたということだろう。佐藤先生と激しく議論する姿は私には到底想像できない。

山川先生はまた実務能力に大変長けておられた。だから学生部長（現学生支

援部長)の要職を始め、学科代表や各種員会の委員長などの職を見事にこなしておられたと思う。学科運営の面でも諸問題に対してきばきと対処され、何かの問題に直面し、対応に困った時なども、助言をお願いすると適切な指示が得られた。部下としては動き易かったという印象があるが、私は実務能力に乏しい上に、甚だ察しの悪い人間なもので、自分自身の知らないところで、何か迷惑をかけていたことに全く気付いていないということがあるかも知れない。もしそんなことがあったとしたら、この場で謝っておきたい。やはりありましたか……。

山川先生は聞くとところによると、ギターの名手なのだそうである。学部学生時代に実際に演奏を耳にした同学の評価が今に伝わるということなのか、現在の外大教員の誰も聞いたことがないようである。なかなか学校までわざわざギターを持参するお気持ちにはなれないであろうが、折あらばその腕前を見せて頂きたかったものである。退官後は授業の準備に追われるストレスから解放され、悠々自適の日々を送っておられることであろうが、もし暇を持て余していらっしゃるようなことがあれば、是非ギターを携えて学校にいらして頂きたいものである。我々中国学科教員としては本物の名酒を準備してお待ちするつもりである。もちろん美味しい料理も。

